燕石十種

傳疝氣

五輯

四

679
47

燕石拾遺四輯 四隅庵

出版数 壹千 [illegible]

[illegible]

燕石十種第五輯巻四　江戸書儈　活東子輯

北里戯場　隣疝氣

むかし八戸が友にてありけるむ川ましかりし哉遠国へ行て経ふ三十年
此頃江府へ帰りし迚尋来り久々にてのたいめんこそ命なりけると落
涙の外他事なし去ながら有て彼人云ける久々にて此當地の有さまう
るはしく見るにかはらぬ繁昌何やらゆかしき事数々にて何を哉先ゞ
なにせよ目に余る先見るべき時分わかちて去かたしき深き道なれど吉原
堺町の事先きこそ聞しに珍敷事ども益々繁昌のそのいね(?)ます
何と云女郎今の全盛なりや古川の若衆なれど今とても此の絶ぬ出合と
うらやみし人も一日なりとも楽しむは此本意なれども久しき田舎住居
の様となり果ても昔がたりこのとなかりて居る斗りなるや其元などは
人のうらやむ場所へ数年身をゆだね給ふは誠に天上の楽しみといふべき
ありし諸里まで取られて行き先まで一寸の行衛も不及去たらく是

679
47

三日顔せき
年懸念
隔絶もちや
さるを我ハと
ナキ年もあるが
れハナドアリシ
ガ上脱文アルベシ

こぞけきハ彼人かゝ腰立て三日向新せどんだと家三十年もけるそんば
さかとふ人柄うそふとものたゞ〳〵年れひ孫子の家をたゞ四ざの
ある此〳〵をば〳〵みかゝ〳〵まとは志らぬ我ハ昔の心すて若ハれなく風
作り〳〵そ不真のてかをそう〳〵うぐさけるゝ濃ハ昔今心の
糠との作ハ〳〵や式ふかそハ其山の糠ゝそ志浦心〳〵ふを此ふ〳〵とハ大きゝる
遠ひ此當地ふ作ふとハ云ふゝう昔ハ川久此〳〵ゆをたらばさふりて心よ
そまぬ事のをたらんゝと心ハ志ひ此ふ〳〵此〳〵此〳〵ハ
先吉家の作昔ハ天地是白の遠ひ細ふはのゝがゝけらまゝんん先
昔の客北風作を志ゆをどんを出ふふゝ〳〵ゆゝもん或を建紗の羽織ハ
茅〳〵英八実ひ八実是八実友祥深菊多深拍の十差家ゝの袴をゆゝ
是袋ふ川ふ出ふ作ふり五深わをがき出て大門をたふるゝどの客のふハあを
がきみて世ハ是てありをあむ志ふら〳〵吉ふふ川て観音ふふを大門近
家〳〵ふをがをを〳〵とけるらぐ多んおん（大音寺）ゞ若とも知をを家ハ川

程のうちハけをがきかけ不意ハを〳〵又帝ハ紋日を云ふ不及（平日）是ん〳〵ふ
大ハふを水道尻まで右側の茶屋の客の客をを孫ら〳〵九右ふ女帝ハ〳〵と
ある居ハ客ゆゝ中ハ揚屋女帝の道中時分茶屋の二階客女帝酒盃城〳〵
ちんゞ作〳〵ふ今ハ又帝ハ紋日とハゞど中の町ふたゞ〳〵客をんて女帝ハ
稀ものゝ吉ハ茶屋の芸ハを抜てみぎやふ志ゞ〳〵夏を燈籠（提灯）〳〵式
書〳〵たる有さ面をゝ〳〵女帝のちゞ〳〵ちんを夏ゝ〳〵たる時も有ゝしが
西田屋茶屋ゝ〳〵せ〳〵を吉家のおと孫ゝの芸表と出ひ〳〵有ゝしふをを（停止）中
の町の茶屋ゝをを沢ゝ三味線ハいゝ成事をゝ中ゝも三浦三郎ハ三ゞん
家と名有孫金侍代三浦助義澄（義澄）ゝ子孫四郎のゝ〳〵ん〳〵も九の円三ツ〳〵云ん
ふゝ川て代家ふゝ〳〵ゝと云名絶る事〳〵孔雀紋ゝ志ハ三浦ふ孫ゝの事
ゝ尾崎雲小紫三國半ゝ支代名絶ゝる事ゝ〳〵ハも三浦心ハて女帝屋ゝ
中ふ代〳〵流祭せ〳〵ゝ家ゝ江戸町西田屋ハ吉家岡要の又左衛代〳〵名を復中
ゝも道想ゝ〳〵る老人ハゞ〳〵ぶん（文キ）さいゝゞ（ゞ）ども有て洞房語園と書を出〳〵

諸所節

其外美事もあるべしてざさいぶ一の達人吉弘の故實ゑよく勢を其名
今ふ孫きり氏老人存生の間を吉弘の作法も乱さりしを揚屋茶屋吉弘
風俗ふるゝ〳〵客の扶持根事もなりしゝ今ハ茶屋の若さをめざし
俳を見るふふ所の美を為ちぐふ羽二重紗綾ちり名ん金入錦の帯銀の
表世間一年ゆえ三分ほどの行ゝくあるを拵客ゝを上座ゝ上を咽ゝ
こなゝたいこは不持して客式たいこのおゝ〳〵山ゝる松亭を云いむ〳〵半屋
我と安今〳〵時のおゝ〳〵金をひ拵ぶと云事一切あゝ行ゝ仕て見ても其紋茶
おゝるおゝ海と云事有〳〵今ハ皆其こ海ふあゝぶ梅ハぢ〳〵ちを朝夕の業と
ハ昔もぢゝ為きせ〳〵ものあ〳〵げ〳〵ゝ海を事とせ式今をぢゝ為き
式たゝゝと〳〵ぢゝちを為ちぬ者を飛為ゝと云ゝ浮名のおゝ〳〵手音我名色
友達ハ〳〵ちゝの小八甲良志摩湯屋の又ゝ清寺町業三郎づの三姫式類斗りを
形拵別目立を須世の風俗を拾ゑんちゝゝまげのゝあゝ者と元結ふぐ瓜つ節
さんちゝ〳〵ゝを迷海げのゝふ〳〵ゝ式為せふ袖ハ尺ゝぐあゝ袖袖ハすゝる茶

のきゝぐりあゝ〳〵中ふ為ゝの風俗元結二寸程ふ巻を内ぐハまりち
大ぐゝふ元結ひゝけ丹後の寺そぐぬ地をゝぢる程の長小袖ゝゝゝ女の
おぐゝゝを元川ゝりかゝを鄙編価の編緋襟袖ハゝりを郡寸出〳〵み服織
あ〳〵の長服美一年藤を多ハ行を助ゝと思〳〵出立ゝ〳〵笠頭巾ゝぐる
夏あゝく町内の色友だち角万字屋元屋小松屋末示大松屋市郎
を清元〳〵ゝ立を清芳屋菊洲津國屋梁洲今存命恭甫と改名中美字屋勘を清竹屋
屋友蔵松葉屋半九郎忠平屋助九郎近江屋仁を清ゝ式出合と深伝濃屋田林
金屋治右衛茶屋ハ懐屋作右衛伊勢屋与を清松屋八を清松屋伊右衛今ハ存生
式類拵者ゝゝあゝ事あゝく拾ハ人ゝ連立ゝ為ハ云ふ不及ゝ為ゝあき
歩行ゝ外の客とちぐひ拵別ふ立あゝ為ゝ居る女郎ゝゝあゝ誰さん志ゝ
行ゝと云客ゝ〳〵ゝゝ毎日見ぬ日をあゝ〳〵ゝと為ゝ名を張ゝ名〳〵居る左ゝを家浮氣
女郎又を若き女郎ハ女郎ハ女だい斗ゝゝゝゝゝ郎を為ゝ深を為たらふ為をつけゝこ為
たハ数多き女郎の為めゝゝゝ返事ゝゝ世ゝ女郎の為ゝ美〳〵と

めぐ拾遺ださるゝぶだふなんとの唫ひあるべる女郎のあらんかぎりよりて遊たゞる
武丁目の大湯屋と云へと川ちう屋敷屋会清水みて猿屋出一番ちう真大湯屋を
集り所として道中する女郎の吉原(ヨシハラ)評判ちう元後ふハ武丁目の角をちゐれや
と名付甚郎をちる女郎甚ちんが傳一式事ふ思ふ事ふハ元祖河東茶屋
方ふ出入一元祖三中も茶屋方を宿とす一来ふハ三中ゆ蘭洲ハ河東ゆ
みて河東郎のちゆるさいちう女郎の疫災又を揚屋すとも恵ふ上ちう三味線を
引き語を立女郎のうを乳ふ歌事のゝ紋々樂一ゝとそ想て女郎買ひと云ハけいと
あくてハ自分のつゆうちん斗みそいたるをゞるかちんを敬ハ疫災拵びの円ハ曲りなりも
ぬぎらるをものあんとも座ふ入女郎とさゝむひふなるをたち時皆おゞゝちう也と女
郎座へ来ち付座入ちる躰ち今目の去ちうりて変系移をんが出せば
ぢるかはらをして呑ちるも心を行といふたらちうれとうゆて色
ちる女郎みハ吟一もちらゞ出二階へ去ゝ年風ちゆゞりある事行を女郎元の名
ハ兄へ爲が連ちうさそうまて来ま一ちる世躰ハ行屋とちゆ出ふハ行屋でハな

いち屋ちゝもの名をたゝちゝお銀と云てきちうら思ふ若いものがいちるあるゝ
云ちず語を云ふてもろくふハいさ川せぶんば又思式うて打表ちんば月式
うけて十さんあゞゝ以へで女郎をおちひのちゝとゞ川とちてもあいさ川金
出をみをまて目をうけて十さをこハいうんたを仕者たの如くの客のちある
中ふちゆゝハ女郎ふおゝがらせて想て仕ちるちゞゆゝさゝむひの多今先階
をちちゝといゝも吟味強く毎日五の円ハ行をとちふ妻合夕べの飯四をた
で女郎ちう行と言ゝさ方ちうら又行と云へちをば女郎の方ちうかく云てう
とかゝゝも色ひ事ちゝく多ひふちゆけて吟一合をせちゆハ出来ちを云ち
さいちうかゝ川ちゞゝ多ふ吟味のゝをゝ多ゝの右丈女郎角百字屋ちをば吉
羽伝流屋ちをば春日野小松屋ちゆゝ紀井中万字屋ちをば歌川ちゆやんば
出ざんゝゝ清ちう茶屋なんば赤雲揚や女郎小野川三ッ角ちう尾勝井宮古語ふ
城や女郎花大ま川屋松ちゆ投ちゆどいふちう角のちう者ちゆふ女郎真家ゝの亭
ちのいちちうゝたちゝ客のちう付と吟ちゆゝ久へハかゝのちうゝ云ちうしが

行と云てる事ぞと思てあど雅言をふて間を法をせ又をしをみぐき立て今
味をつ考る事四度余り大きなるをいかなる事ぞと云ふ事にて女郎の様子
あきをもちることいくど町内にて志西国より因前ふ云てられ金を出て多間
行ぐる二階にても人目に思ひをかるるまでもたれ西国乳比丘あの宝座の
客ぞや氣を分ぬを拓と云べば面りるを古西の新して座敷座敷見事ふ
うふ沙者ぞとやかく云ひ出ふつけ始ふ酒ぐらうけをせぬ世ふ世ふ
うく人ふ見物もしに心有る客い然しときらとといども若き客を惑らぬ
ふの遊ハ皆ふふを出てしみ女郎買をたが新人く縁式持て我ふ出合
ぬ事まで皆似せ美顔髪の四ひ方と紫ぼひ皆我がふうと時を不出合
人もうる式見出ふが為ものをごけるどふなるもれ〳〵なる〳〵場を元ハ
皆面屋式学び美顔ふ眼鏡のさしぬ黄色なる見袋今迄も強を面屋式
元祖と云ひ町を甲良志麻ぐ風俗を見なひ今ふ迄ふ為の為〳〵藏茶碗
形利情
志ぬ志ぬふふの小人を祖師ふせり根津十谷遊ハ室能三姐が風也至極十

ふとといども女郎買の志ぬん細ふ吟味して心を盡〳〵たの〳〵こぐ系合の事
成しが色濃の風俗をもん〳〵の為生西若志ぬ〳〵て女郎買の事甚不吟味て
強く自斗り通りるものみて細ふをけを知らざる西年式をることといども死ぬ近
此著ふて志ぬ〳〵る度其付の風俗然〳〵といども今付の女郎買の乃ぶ事ふ
行ぐ度度ものとて〳〵ぬといども其度者ふも通を者行り心を出をとふ
ぬとふ行り諸義とても女人ふ為〳〵と家といで其道ふ心ぐ〳〵ふを家とのい
西斗ふ〳〵とふて義ハ中るを素人と家といども其義ふ心ぐ〳〵度〳〵志ぬ
成を鬼ハ志ぬ〳〵となるをど義ハふ〳〵ふとあり役者なる式如ち宮地芝居といども
上るふり懐町の役者といども名ハ宜敷ものをごも十るを〳〵見分塙而
みて上るを十るふと云事業て有〳〵今左右の浮氣をのもなく當時の
若き者ハとても然ハ引込志ぬんとみ四んど四所のぐ〳〵の反者るハ系の大金
ぼ込を〳〵女郎の風俗も昔ハ紅粉ふ〳〵ものを出て紀事〳〵ふ塙
面女郎の為化粧だふ行ぐやふうこハ云ぐ〳〵ふ〳〵ふ事ふ云ぬ〳〵髪ハ元

やうごとなきもすびあら板よりてもきと上ケつまづくふつまづくのざうを地女と遠ひ
寺藤ちゃうに女郎とせふ今の風を髪は油ぬくゑん板は下駄の歯のやうに厚を二
三枚さゝ籠とて色〳〵とちゃうに七八ヶさゝちらゝ蒔ふ賣ちゃう
だゝちら弁慶の人形やうに見ちゃうがゝ〳〵天氣の能きは下駄ばけ助方の吉原ち
と思へば上巻が分振をちゝて掛屋入と云事ちらず踊ちゃうかと見ちゃば小袖の裾
を巻取巻ちゃうて伊達ちんちゃいと其昔ちゃ屋ちゃど見ゆ吉羽町を丁目
結揚屋虎屋魚屋相撲屋なゝど鑑昌の付ちゃうい想斛の風俗をちゃうかたち
根津品川みゝて い庭鳥と廣〳〵かゝい志ほらゝ〳〵ち廣も有ゝちゃんど想俳
のやむせちがらきちゃうゝ風俗のいゝきちゃうを浦青羽町と品川の金のちゃの
と見ゆる其次第夢茅屋花園洲庶武条と張れを出〳〵江戸町の笑ひちゃのと
ちゃゝ〳〵其後俳〳〵ちゃゝ武条の図市〳〵掛ちゃ式細〳〵ちゃ〳〵ぶ川つけ見者と
云ちゃゝ〳〵式ぶちゃも吉原の めつき(滅却)ちゃゝ〳〵ちゃと云〳〵ぶ今ハ大ちゃ武条を中ちゃ吏
女郎ハ吉ちゃも切ちゃ賣ちゃ〳〵ちゃて三分ハ賣ちゃ切ちゃゝ〳〵ちゃ録の

切賣とも田樂賣藤屋の物ちゃど賣ちゃ物ちゃ出来湯屋うどん屋まちゃ多く
出来自由藤事なんばかい買ちゃ(買喰)ちゃゝ〳〵女郎ハ袖〳〵き不仕ちゃ〳〵ち外
細ハ芸〳〵ぶ〳〵吉ハ仕て安賣ハ〳〵ちゃ〳〵ちゃば減ハ思ひちゃば物〳〵いゝば
業日ハをちゃもちゃと云ぶ式ハちゃ〳〵ハ仕ちゃども皆ハ賣の中ちゃんばる物
ちゃハ仕今程ハ江戸町新〳〵絵の亭を溪蹊と云方をかをハ武丁目ちゃ長ちゃ美仕
ぶ事〳〵物ちゃ〳〵ハ仕て ハちゃも彼のゝ江戸町の半平言役の小田部斗強ちゃ孫
ちゃ皆〳〵古人とちゃり松屋伊右衛門未存命昔の吾妻屋大ちゃ〳〵屋角万字屋物
ハちゃ云ちゃ〳〵ちゃ仕ちハ金盛ちゃる女郎〳〵家が拵ひちゃて ちゃ侍已侍庚申待物とて
ちゃの物ぶ出合ハ俳集ちゃ芸藤藤ちゃちゃ巨其世話ハかの伊右衛門興言侍仕右衛ちゃど
積合大きふまちゃけ有ちゃ事のゝ云出〳〵ぶ今といゝども昔ハ〳〵ぶ物ちゃて
ちゃのちゃ〳〵さちゃの為吉原〳〵ハ仕といゝども皆述懐のゝふ藤仕物ハ物ふ物ちゃ〳〵ちゃば
巻きちゃの昔の有様ちゃんちゃう思ひ為て家ちゃ〳〵ちゃ三ひかきちゃどう見ハいゝふと物
といゝどがちゃんゆゝば為ハ〳〵ちゃ〳〵ハ仕出せば元ちゃゝ其庭をちゃち

伝る話ニ残るハ皆老人の云る事ニよりて法ハひさしく行きたる事也
のみならんハおもしろきといひ候へバ猶く存じの外繁昌し其辺りの迹
懐つかしてよ堺町の有様移り変りしと云ひ夫よりなほゆかしく其辺り西向
かる傳じ先達でも多くれと志だし先ひに無益とおもひ猶く志だし候ひて
故人云るハ是も其の盛りまことなりて是非とおもひ其迹の事ニ是より
堺町の咄しとなりて志るよ傳へ候へど力ニ不及是より壱番目初りし

一 拍子木ハ候へども銭ニ添のハ稀切落し中の同ハ近年切札と云事時花（はやる）と
いふせも果ぞ彼老人切札とハ何思ふ事じやと云ふニ近き頃六千四百文の安札を
出し入込ミて仕る切落しハ十七八程ニ候ひしが今ハ八九十百の余も出来
といへど未だ何の事か知らずと云ふ事故ぞんざいなりけるから咄を事に免しといひを
いふもし是ハ我等が初めより然も世ニおりたるさんと思ひて取らんと
云故我等入込みたるさん志よ候ひて南ニ孫太郎宮川八郎左衛門甚後候へ
稲生故一三浦右衛門戸橋助太郎木挽町ハ坂東太助仲又郎今ハ猶ス

郎吹屋町ニて八平九郎数年勤め後又郎平九郎などハ年久しく若者ニて
芝居の格式も覚へ古實も残るかのように見ゆれども堺町ハ大坂屋先後舎
子なし世話ハ甲斐なし由ニ願ひ立ニ繋る故ニ楽屋の法式も崩れ杜切場
用有由ニて取次を候ひことも道ハ之け行かぬに候ふと出せハかの老人
清らじと更先刻より縁ぐの咄しちがひる此度るまひが意外ながらおかし
ふしぎなる事ならねば又おかしき事ニ候へねバ一寸取り度事なりと
云故左様ならんと存じ我等もしもさんおもひく云ふ事何のえがたきを
なしおもふ事多く聞て此先んと申せし咄再三此好き故知らねみちなれどもたい
ぐい目ニ至り多き事ハおかしく申たり先是切ニ此先んしといへどいや是ハ
真似し我等が行やまり此処よさなりたる事をお別深くけと思ひて此先ハ
され其おもしろきおかしき故おしかへし亦思ひ此かると思ひもなく云ふに左様な
らば此方のちんの来らぬ前を約束られいと云ふさんだ近年古参の業
の事などもおのの外きらびやかなぐきれどり深くしして銭よならぬ定数だに

あどりたいこいりて客氏たいこ同前のことをしてあるをとはいうみたえ拵ものに
らくくうめる客ありといへども茶屋つゝ極の客としてハ左極の志高の
小倉ひ中〳〵が川ちんをせぬもの所左極る客氏えりからんをしてい茶屋ゆ
立がくらん先年茶屋の門みて平野屋漏右衛門あとゝ子のハまげ子行
ものこゝろふ見へかゝる弱き客又い鍬ふ物りさゝもなく客とみまゝばさるの
先ゝてたひ〳〵ら〳〵懐屋佐右衛門大和屋利兵衛松屋八兵衛あども右の新いて
こゝろもとの客ハ嫌〳〵ゞり理兵衛客を家ろとゝ子も我がこゝろもとの氏
鼻の先へ出〳〵ゆ〳〵もゆるゝこゝ客をゝ金銀為ふ氏客といへども氏てまい
ものこゝ子りこゝ子分ものこゝ子ものみてこゝろ見ゝい客ゆも由ゞ仕客屋居吉ハ
男振もよ〳〵蘭洲三中〳〵ゝ子りゝ子仕ものこゝ子屋客屋をもゝ
ゝいものこゝ殿為伴の取ゝ〳〵ゆ〳〵ん〳〵の能き男四〳〵さらもよ〳〵ゆ〳〵四ものこゝ
ありいせやゝ子ゝ吉ハ尾ゝの茶屋ゝとしてお乳ふ入ゝ四ゝ史をゆ〳〵鼻ゆも
かけ人のかゝんゝらぬ男ありゝ又女郎も数の結ひ形風俗能〳〵ものこゝ

たゝ〳〵ゝ三浦の指ゝ上郎和奇浦壱尾松いへハ其頃京橋四ゝいへ数
風ものり油ぞ〳〵めゝて橋四ゆ多り今仕て松屋の伊右衛ゝ丸ゝ小倉郎
あど芝〳〵居ゝらんれあんを昔も油ぞ〳〵めなきゆ〳〵も行ゝを赤堀所の
引れとゝゝて存ぜぬが仕切場ハ昔より数ゝ〳〵行ゝ〳〵顔取を仕切
場ゝびつけゝと早速引屋行ゝ四〳〵のゝ能ゝゝ〳〵ゝ晴がゝき
ゝを四ゝ屋ゝ顔取ゝて左極ゝ極ゝ〳〵ゝ成りて〳〵楽屋の志ゆ〳〵ゆ
ゝがらんお嘲〳〵の張きゝ方さ川数ゝふ今極い吉ゝ〳〵ゝ四〳〵ゝ山城
ゆゝゝ〳〵ゝぞ〳〵合ゆ〳〵ゝのゝゝの形〳〵雅取とゆて志ゝ〳〵者もゆゝ左茶事
おゆふゝゝゝず〳〵て行事も昔をゆ〳〵思ひ合をゆ行りて針極の事を棒極の
ゆゝふのゝ〳〵ゆゝゝゝらんゝ近頃意外ゆゝゝ時代ふ抑移ゝ今の人ふ別ゆゝとゝ
ゝ出合もゝらん拵ひふもゝらんゝ役者も七三代九郎平右衛平九郎初代ゝ千
郎芝ゝ之助門ゝ助丈ゝり陸〳〵ゝゝゝゝ海老蔵ゝ助廣治長三郎長助
代八芳菊菓ゝ座菊次郎金代あゝ先拵見ゆ〳〵目ゆゝい家ふ迎ゝ同〳〵事昔

の楽屋の倅仕切場の格子役者の身持なれども今調子ハ数年心懸し常く
養いしまい吟味しけむづらは何事もおきふいらぬもけなれども芝居をも
今程ハおやじの者死失せ今此者も当座をも志てゐるとも今当座の能ふ
て知らぬ事見ぬるき事世話致やうる左様しも嬉しからぬ名前ニて志め
らそんのゝ微ふ障のせんがを頭痛ふやむといふ当座の事つらく候をぬやうふ
なされいと云来てさゆうならんと存じてよき折ふしより志かしよん年は
志て傷致ゆしたと思ひてハ氣の毒とやら是ぎりおいとまし申ぬ此まふハ
よしあさくさ町へお越なさいて見まして格子致ましく見えるへとみんな川をこそおか
やまをさふらましたれ共立腹でハ無之がさらばんまする一言も不申金をおますまん
夫はまづお出しなされいといふてまちなりさゝ又おまへも其ぞゆるこのと云へぞ
其仕切場をぬ仰と問ふされバ其事で此座ゝ昔ハ一ゑんさんとむかし平太郎
吹屋町ふても左右衛門市左衛門堺町岡場里卿など鷹羽二重の小袖なら
きの前中差三口分程かしも珊瑚珠仕切場など不残黄染など一寸なりても

弛先ふ今なりしが今でハ茶のひら川も香のゝ也其時分ハ髪も志きりなり乱
と云ひ格子風といひ元ぐんのうしろわけなげ流れ此出しふも此年から
ぬけるとのゝなりしが今も京出も志まぬ其の丹後縞の鴻布子縞の小紋の
羽織などいきなり古き屋かと見まハ猿金の志るし大工やら屋根屋やら
見まるけでもし此方を年久敷きれいなといふ者なりあらハ不残気なる人の貞
すれど此方ふてハかわりて志らぬ挨拶へまいりて居まバ時としてとかく気ふ掛る事
有ど云なされてそのゝもいちまいで役者ハ先年當十郎幸四郎半九郎などいへども
又百両は高とせしふ今ハ七百両八百両千両ふも志わめても取り他者も津打治
兵衛ハ其今備なるものといへども百両は高とせしふ今ハ三百両四百両の大金は
取り給ふ成事といへども役者の高大金ふ成るふ自然となりひての事のなせ候く
志田うち致志し右致ろりするといへども狂言の一新は役者がのさわぎ程ぞ他
者のとがとえ役者も高金ハ取とも気ざしうをそれハ我なりまての役目の出致
まちら成四天王でも忠臣でも今川でも祐経でも公家でも武士でも町人でも其ぬを

甚ふたると云ふ事珍しく見物が嬉しがるゆゑ俄におゝへやんやと声がかゝれバ猶さ
へ仕方がよささうなと思ふ見物も昔とちがひ其役目相応のきうちハ誉ざる也へ
實悪の役をするがゆゑ愛敬をもておもはせるといふハ何の為の實悪ぞとわらひ實
悪ならざるなり有るハ当目にいそりれてかと思へバ次の幕に立髪月代を延て月代
がのびるとも云事なからんが初めてつけ立髪大髭をかけるうと思へバ次の幕
にハ判立髭なし此間月額を剃たと云ふわけも不知なるし役目のうちにさへし
ゆゑ強ぐるかきまバ論ハ言ふまでもなけれバ津々の浦までもしかゆゑる昔の事
なるか剃てなし花道へ出るに掛るハ志田も有るが見物をめ剃たふならむ鉄を出し
てゐる見物あれバ多くへかゝる事とのみもせよ其日一日のお客あり豈外にいへん
不届ならずや以ての相当ならむそふらむなら狂言の事あ思へたるもかれんもまるみちりて
ならむハ柏莚以前なるまじども柏莚がならむハわけもかり人にもよるべし其外の
ものゝならむハ物の表紙をきるからそあらん千本桜の狂言に柏莚ちし源蔵
の役に平服式老人の形ちにそめ剃たよふる之多く皆さみしたりしが此のふるへ

ハ今時の者のがてん由く事にかハるに調子ハさらにをきなしで感心させりしふるへ
まうゆゑさるしたりし役者ハ我身丈に合ふ思ひ合せてかてん行まじ調子が清盛
あるハ将門物ぢきさ赤沢忠信由良之助などの狂言其時芝居も崩るゝ斗なるらん
にさしてかゝる事なかれハ皆見物の下手也其下手な見物が不むかふの役者ハ
いよいよ下手なるべし助九郎辰十郎彦十郎かきわらかまはぬ世の中なればなが
かるしき事ハいふかりなし敦盛筆を出しうつて迎ひハ舞台の出入の其三味線
ならバ役者の為にハよしき徳也出入の前に幕をきるまで目立ならしきと云りのも
未たるをぬぐにも此中ありひハ足袋をぬぐふとおもらし木のおかげでいくし
徳元
よくきゝし人をまらく小柏子木とい人のかはるも枝のまる同様なる仕方なる秋の
狂言よりも八百屋お七ハあまり時代ちがひと思へバ近頃も曽我ゟ隅田川の厩合戦
をも成なるから余り人をたまげにしまる事とたりへど見るものもけがあまバせひも
なし昔ハ曽我祭とて五月廿八日七ツ前後に見物をかへし三階にて杉の葉をひそ
神前を作り舞台にも同じく櫃にかまへ名代の大看板へ酒造備へをさゝげ

惣役者揃のかゝえらは差し志ゆぎりをすり袴にて三階に集り座席は改格を
たて二十四文字の科程に縁く拵の口上書を出し真に志ゆうぎんだらど
うちの芸なども揃ひと共に吟し之を事にて候しが今は当秋祭
まとやらにて狂言のなりとぞ舞台は道々自身とだしなどはかかりざ
当秋祭りと名月見物は行く一つなるだてとて又座付といふ事にて惣役者
上下にて階掛（ハシカヽリ）と花道から出舞台にならび居て縁く其外の祝舞台を出し
差し女子方立役どもより壱番づゝの所作を替る事有りて附合助を勤る上
るり太夫にて一段づゝ語りて後は元祖河太夫三味線岡安茂九郎鑓
踊りなど語る事も有しが今は只差しそのも稀なり
一囃方も一ト狂言に所作事壱番づゝ所作事あるべきに斉なるにて殊更て面白き事をと
所作しが今はわけても當てもなるを獅子の形のうち斗りにて舞へ残る事も
なし去によりて舞台にたゝ居付て三味線を弾くはし達者と云ふよしなり
志ばらく引志めと弾出程者なし已えて拍子しきばしむる事は如く拍と云

事なく候とても輯ある顔向もなく只紀付て位置の上に立るによりて藝
にむさくるしといふ事なく古實は尋るもなく古き事と知るもの
なし口そぎのうちに世は流りかはしも古芸者は見かせ誰が言むるものと
なく古き事もなくて先は伎合済る世の中流めの役者も今は志ゆまで
くまへ付ると我方から見んとなり御足袋出しごろは難にならひたがる候り
会て世なくへのがらせさりしは迷惑同じ役者の仲なるいふ法のなりとて
ゆる志ゆまとも一定めりまかさなり會せ其上へより小ぶ扇ぞ楫総の外は
ちと遠慮してとらいたはかなるもの所作もなく久しくかゝ居るといふ
も舞臺の狂言を我かに宜しくうけてうちのおりの家から志て出る
者にうく狂言にうつる者は今は俳諧文字又は茶番などいふ事出来
まふとは移し居てあり一ろふに不合大いなるを切てもなく道をうけてわげなく
へかるとみらしく出る者狂言との法を合ぬけてるめると云ふへども見とがむる
ものなく先出てみるさへあれば事済み死なるまゝや役者我に此せしはなる

こゝより舞臺まで取はくうちも持なく思ひの外遠く覚ゆる是舞
臺と川とつゞきて居るゆゑなくてハ出ぐるし也さるによりて花道でふりをなり
色しる身ぶとんで由ぶらうちと締りしハ花なり能ふても階がゝり又は
うちに有る事のよし上る所ある也まげりありし也を思ひ合せれバ也る
道ハうちに行き過ぎらりしなくハ古き家なるらん見ふも昔ハ也る道より出る事
稀にして皆階掛よりいでたり然るに我の狂言に又五郎市松染勘九郎又五郎にて
矢立の杉をなる狂言をする事のかゝハ也ずびりしづちを取あつかさを出ありて
今ぞハ弥陀笠抔は見ゆる古ありしこともいちんの老人見まバ也なる事之敵を
井身なれバ是ぶふも是ぶ事かんゑうならんましゐて鎌倉時代に六平白ぎ
狂は見える故をもちの上にある笠に致合ならバともふ弥陀笠は前ふ出りに
然一世にその也ハ也る道より出川屋家は階掛りより出てるは今はかし
思ひ廻らせるに至極かんもん此事也りしやまちるだ見られまじ此類思ひ
でくるに限りもなき事之十二三年以前堺町にて鏑子由良之助をせし時

此度の由良之助ハせん(仁花)かふてすまなり様姿を取立てり来て見る人とろざし
也と云家来を使ふ職を其時の身を今に不捨せり翌日早速行て見ければ
楽屋にて家主も道ひきのうち進ミ道此度の由良之助ハ平九郎でちる之仙は
當て見てされいなどと云て出ねせんかは只見覚へ居てありしが由良之助を
せんかふてちる事さへなく仙は見居てありしが幕がてく此役目見
不出来して只挨拶も致ぐて随分仙は當免同もちなきなど見居られども
ころや気違ゐるかなりしが幕は引くそれ外へ由良之助残り師匠が家ぢるハ此
當節と云てありしが此市平九郎にても有かと楽屋に入てあらづしあいさつせ
しもどよく見てたがいに支度やしと喜びゐるかゝる狂言は素床にお国ふ帰る
なるはお気にも入ぬきが抑し残念なりと呼し気ば彼老人ぬるし我此節
とくとがてんいたした此もの人ハ此当地へ出てるかひもなし家中も昔つまれぬも
きそぐるけれバ素床と同じふて述懐のうちに仙はいさめんより迎ひて国元へ
帰るなりきてゐるのの猿と共に暮し死なむ命も惜しからバ又此国ふかへらんとせし時

是も久敬友だちの老人ちゝより聞ふるまひ居て或人の咄し初より家居らもしづかにかまへて座敷にぜひとりうり物ゝ出ぬ家ゆへ
さゝも政度を存じ申れども お粉たてみもと粉くあるしが出亭をの出ぬし
隣くゆゑ通くゆゑ国をくゆゑのうちくゆゑ
昔風のとぶごとくと楽んでもを出亭をとても今御も堀町寄あく
とても出安金ゆゑ多ゆゑ時の風をもちらくゆゑ出なあるまじと高が
あるべきさらく世と共に昔は遠くなるらひ今とてもちんちゝの場所一年程
出合なりけれがもや初めくもちぐゆゑ蕎麦の通をゆくゆゑ三十年
余の人心行くして出或人のお気にかゝるかゝるべき拙者は今とても年くまづらゆゑ
なく拙者家敷も切り絶ぞ出合拵ぶ四方初めきのもちでも神仏(ミヨ)て出産なる
ぶちくと一通り私の了簡を出ゆゑ長と少ゆゑ当時の拙者も出賢あくれ出産と
ふもなくなるべきものと変化なくなくゆゑ面白き先きぞくくとなるべき一取
亭くゆゑらゆゑ牡丹の振向を誓てお他くゆゑ先きあるも迚年は日

此もの文平さら
黄物出ぬ矢ふ
ナルベシ

山芋蕎とあるもあくゆゑ町人迚もあばいこふのと芝廻り夫を志ゆゑと心得
大名の屋敷居も大きいるおの宅ゆゑ初月をる料理出も通ゆゑかゆゑ
くゆゑ家ゆゑ芋合とゆゑども今は焼物り鍋茶碗くゆゑ常と心得傘
あるゆゑ事有ゆゑ又は吸物焼四ゆゑ外ゆゑ道具にもの大平さら(黄物ふ文ふ)
火を不入なゆゑの持帰り家内のさいとゆゑ其外中結ぶまで料理の数
今由吉家あるゆゑ振ゆゑ事私芝居出の出合はかくくゆゑ禁制と也ゆゑ外は紙事方
小善錆方出代宿方代神賓方使用達くの町人まで女郎買い程仕紙
中ゆゑて中の町れ拵びせぞ女郎屋くゆゑ行ゆゑて想仕舞あるゆゑ
事は別業亭をゆゑ昔の事ゆゑも商ひあくゆゑ金銀ふ入ゆゑ四(元麗)
くくゆゑて拵び多くゆゑて金をひ不用故僅と居ゆゑ出のゆゑふ
ちかざるものもるゆゑのいらぬ拵び四ゆゑかのこまふゆゑかゆゑ一躰をのふゆゑ
ぶものゆゑ出他あれゆゑ我ゆゑくとこまゆゑ家ゆゑ用ゆゑ思ひけくゆゑ勝ゆゑの
ゆゑば是は中くゆゑ拵びと思ひくゆゑ行ゆゑと云ゆゑ女房ゆゑ供自然と

まゝ式ちかろく見えてもまやうえんのもとに世の中かんぢのいらぬわけ事な
限りまつりと今うを世上ちよこはせぬものを人ろの粉ふいらぬようふなりぬ
業屋も客ちとをろんば錢まうけるべうてやせぐまんそを年八歳
老そぢふかのれごりい昔ふ百倍せ〜放棄屋はもぎをぬ羽織ふそハ行とやら
ちをぐら〜〜行ろりを見ちらろ〜級式新ちらぐ式をぐ〜昔を客の衣類
昔川ろうて業屋い暴未國〜〜が業屋ふ川ぞ山國り賞をを川ふ國侍教
新ぐ式かちろふちろも客いがんらびをたろきはげたり表世屋式濃の袋
ろ中〜て春だ業屋い根のぞせちぞ式ぞろうど錦の捲多葉粉金金
わ赤〜ろ行ろも鳴ろうぐ〜ぬ〜の表世屋年屋の白ひぷん〜ちろ式
春ぐど女帝も見極ちいど〜ども自然とどまのちち云業をひ解〜そを業
屋ふ能〜思ちたば能き客式引つ寄ちろと思女帝のちふちろちの
ろろ屋客一下云いぐ〜ぐ業屋ふみッちと墨敬ちろも客のちぞきぬ〜
女帝のちちのようろ〜國ちと云ろもいぐ分かぐぐでも在郷の客でと

屋ろちとの〜能ちろ分客ぐでと一町の亭をでもなるるかけいそろ新ちぐふ
ろなどで云事ハ分りて〜ろ〜女帝の身拵昔ようとハちぐひ世りな
安事年年〜級帝ハいう國ちを全盛の女帝武人り発つちろ〜ても発ぬの云
類ろ為ハ式ちめてろ〜ふ本綿の絵せをを見せろ〜〜ぬ今ハ武人り発とり〜ども
式衣新ふか〜〜もちがちろ行をを新せかろ孫ケ〜かろぐいかんさふ至るまて
稽ろ事なり〜女帝の掃屋教ふて八九屋十屋又ハ廿屋ト云〜屋品ふの捷
袋ろ〜式屋川ろふのろろ式屋まいるんば業屋の女房娘近弾判すろ云
隨ちと吟味〜て恵隠ちろ式勝とちろ能きたいまひのケ〜屋教の恵隠と
月見帝句仕ろ〜程のあ〜金くろ〜客ハ屋〜金式考〜客を肥前初心
安本丹とやらいろ〜見級て世のろら為とかのかんざ〜も屋年ふ分武ろ分
屋屋位ひ羽ろ板も恵隠昔のふちろぐいなをぐ今ちろ〜中結ハ昔のつま
ぐ〜〜の考ろちろハ又ち恵なりかを見考〜合て見の〜たろげをぐろ
ふもせよ風俗行〜式ふもせよさん用ぐ行ふ為ち考ろふ根て肥前でも馬鹿

でもかさかなでもあつてでも此機嫌次第いつでも此怒をまねきけるさしは
いなせなる形見せつけ外も別をまたて又深より内儀のくらしさへあしつい
深を色流をかくし加減なしなる時なれば女郎にむかりてなし来ぬ見なから
新造いよし姉女郎のうちを出て見る此宿くへ土面目ふましさかんとなる今
ハて何屋んさう色恋らけ行の障りもなく女郎屋へちとさまり有て二階へよる
がさしなんど云ひらう茶屋へ此をとひおんりし前ど云ひまれば女郎のうまにも
のところみな返事ハまでことを紙に書きけたまから色恋らけにせぶれバかし
通り者めつらず宿ハ合せんせばせつまぬうちからせうかてふり付しとうくかなり
なる世の有さまなり

一 役者の年着小袖も昔ハ金入錦さけや縮緬或ハ考田を鹿子紋し紋羅
紗へ上用時ハ妻子の小袖又ハ衣服とんるも用ひしが今ハ法度ほよく紅
緋りを定まとしつもなき縮とりんへさ候し自然をしなる縫又切付などて
夏衣も繊の如くまたる故氣と表すて又五十両の付文も有りとるに陥りて

付の用にもたゞ昔の金入錦よりハよる乏しけるうえ壱番目に先なる衣裳の
冲るにて次の幕にて花嫁ざればちやまるし云故也と狂言にいふ歩きしきさん
なる昔とちがひ二役三役けるり又ハ役のつなかるにより朝から晩まで出詰め
せり始の書抜昔の又そうはいたながく狂言本もむかしの氣と狂言が今の一ト幕
程なり能くなる書抜などく珍らしを昔見るまね色し珍敷からら是まで座元
なるなりたゞへ七百両八百両と定にもせよ本金の上に入るハ三分一も有やなし
自分の身の入ることハ絶し云ことハうそしたてしとなれど我身ハ金とらぬども
外へかしとうるなへやうに自然となり甲斐ももやき大入有ても給金の減事なり
本まハ銭にさなかる様どもかふらなまれてまる迄のとりてたいこ持まなる
意とハ思ふまけれど金をとらぞ我者共をひ付を以て妻子共をどくまんやうし
或三人力遊女あるとぞしきかり来り何の用にもなるまで役者をやめても
外の商ひハ去らぬ芝居なるんば外のことおもひなさり仕事も出来ぬなれば
故いまの因海よりな藝は魔くよまそがけらんとし其内にも藝に心ざし

深くかくれ成まいらせ候ハいちまき伊丹なども左こそ〳〵ものに一日ましに藝が達
かしく成て切落しにてか川てか川んせず其ものまた八藝澁しく成る故
むかしだんだん〳〵どうしてよふ御ざります
一頭取と金元と云者なくんバ役者の世話にてよふ〳〵狂言も取立られ
けちらからとせうずらきもせぐみたりちの物かねもせかん役者からきき故
なまじバ名のみ頭取にて何やらきまぐ三階へも二階へも行かう晩まで
まじ事斗り引込もなく根ふと斗り致し
一又離るも元と狂言に不絶きが勤り有故さむらしきせかる我も〳〵
もく数多く甲乙なくが今程ハ朝か
ら晩まで休なく一日に七八十度も舞臺へ出る故何の稽古も出べきや去れバ
取てハかしこも角へかしこも又せりとハせ当座まかなひ何やかや
丸く合せて勤めハ何のき苦もしがありる病ならさ候ふさらきにても出来るうちに
めでたしといへども及かたし仕切場も金もいへバ仕切場になるまで云とも
其金も前りがたき故皆持んと成り世の中さまざまに遣や当なりて芝居
出る金ハまた〳〵ものと思ひとりて金出来なる事なるとても金行ぐさは
故ちひてらもしそんと成るに遠ひとなし去るなら日て其羽二重は芝居で
珊瑚珠がさひ成べきや昔の金は行て見かひてハ元日そどうしてある今や
まる歳と出せど老人はしく中ハ異見に任せて志ずらく〳〵ハ当地もとまるものや
さんけ亭主も饒舌とやらおせじとやらをやめに志て今初て見る様なる物ぞ
御多所いちと出世行くらだ秋のむも出結びしハ老人は先達とし取続へし
二条とやらへ入ぐとやらちどめとやら女郎ともに見よ又芝居へもいて今の手本と
云あるくとやら梅さんとやら祇とも見物はさん志てし又郎のなならね国十郎
とそめづらしかりん是も家が籍りて面白しくと先今日ぞ是まで
ごん〳〵
時を志らぬ出伏なりと家身たてがらきちら紙なく隣の病氣と名
付しハせ死ての事しえ

未正月

昭和原武吉夫
行年六十七歳

花吉川かるる高瀬氏志ら浪の
影のみぬれてゐるとゝ波

かぎおくも跡の形見とならばこそ
折くちるべえゝとゝもみる

丈久元年辛酉八月廿九日流覽一過　活東子

明治二十一年晩夏　筆者　妻水頼德